

佐々木義栄著

『佐渡が島人形ばなし』

秋谷治

1

佐渡ヶ島は芸能の宝庫である。島に三十余も能舞台があり(居間を能舞台に見立ててしつらえてある民家もある)、中央では絶えた鷺流狂言も今尚伝えている。民謡の佐渡おけさは北廻り航路によって九州天草のハイヤ節が招来され、佐渡南端の小木より上陸し相川の金山に伝流されていくうちに小木のハンヤ節、小木おけさ、選鉢場おけさ、佐渡おけさと変化発展した由であるが、その過程を今尚辿りうる土地である。こうした土地柄であるから、竹本義太夫が近松門左衛門とのコンビで創始した義太夫節人形芝居(今日の文楽)によって淘汰されてしまった、それ以前の説経節・古浄瑠璃系の人形芝居がいくつも今も語り伝えられ上演されているとしても不思議ではない(いややはり驚異的なのであり、その奇跡の秘密の一端は本書によって解き明かされている)。即ち、説経人形・金平人形・のろま

形・文弥人形(人形芝居としては明治初期から)である。東京都程の面積を有し、佐渡金山や北廻り航路による繁栄や島中央部の豊かな農村地帯(そこから海は見えない)に恵まれて、これらの人形芝居や語りが盛んに行われていたと思われ、離島に三百年近く伝えられてきたものといえ貧弱化の途を辿ってきたものとは思われない。語りや上演形態において随所に古い要素を多く伝えている。その理由はセミプロ的に語り演じられてきた軌跡があることや能舞台の残存によっても類推されるところであるが、史料不足の困難さにもかかわらず精査探求された佐々木義栄氏の本書によって自ずから察知推測できであろう。

しかし離島のしかも民衆のなかに伝来し育くまれた芸能故、世に知られること少なく、戦後に至るまで研究も進められず保護育成の道も拓かれることがなかった。戦後いち早くその手を差し伸べたのが佐々木氏であり、半世紀に亘り表立つことなく篤実に文弥人形を中心に研究と啓蒙普及・保護育成の労をとられてきたのであった。本書はその集大成といふべき労作である。したがって本書の性格は「人形ばなし」と題され「研究書ではありません」と書かれる氏には不興を買うであろうが研究啓蒙保護育成が一体となった、学術研究と実践のための手引きと聞き書きとが有機的に総合化された研究書といふべきものである。昨年(一九九六年)は評者にとって悲喜交々思い出深い年であった。二月二十八日に唯一人江戸初期の説経節を伝えた佐渡新穂村の霍間幸雄氏(明治四二年生、享年八七歳)が鬼籍に入られた。三月二十六日に佐々木氏のライフワークである本書が上梓された。八月下旬には畑野町猿八地区という集落の廃校で、

文楽出身ながら文弥人形芝居に転身された西橋健氏が労をとられた文弥人形の伝承を巡るシンポジウムが開催され、最新のインターネット通信を利用して宮崎県山ノ口町麓地区の文弥人形と、佐渡へ来島された石川県東二口地区の文弥人形とそれに佐渡の文弥人形とで相互交流・技術の紹介・伝承の現状の報告等がなされた。三百年の星霜を経て元来おそらく源を一にする芸能が邂逅しえたのである。この二つの出来事は佐渡の人形芝居・語り物の歴史において大きな転機になるものであり、評者にも啓発と反省を強く迫るものであった。

十数年前、佐渡に説経節が今も伝承されていることを知った評者が霍間氏の下に駆けつけ調査を開始した昭和五〇年代中葉には、既に山本修之助『佐渡の人形芝居』、『郷土研究佐渡』誌(人形芝居特集号)、桑山太市『新潟県民俗芸能誌』、信太純一・斎藤清二郎『のろまそろま狂言集成』、斎藤清二郎『日本人形芝居(首)かしら』、河竹繁俊『諸國の人形芝居』、永田衡吉『日本の人形芝居』、佐渡歴史文化シリーズ『佐渡芸能史上』等が存していた。これらによって、昭和二十年代迄不分明であった説経・金平・のろま・文弥の区別も明確にされ、一部の台本の翻刻、現存の座やかつての主な座の(また首の)変遷移動、主な歴史的資料、首の分類や紹介など研究紹介されており(その多くの調査の影に佐々木氏の提言及び研究があったのであろうが)、概容を捉えることは可能であった。

しかしながら、佐渡の説経節を江戸初期のそれとしてよいのか否か、また台本の残存伝承状況やその本文の内容性質など一歩踏み込んだ調査の必要を感じさせられた。これらの先学の労作

を元に霍間氏はもとより、「竹田書き」と言われて今も重んじられている、幕末明治初期に台本の書き手であった小田這茂宅(数千冊の金平本他を伝存しているはずであったが、虫食いになったので処分してしまったと知る)や、佐渡に始めて人形を伝えた須田五郎左衛門宅(この宅でも古文書を廃棄していた。補完資料として『新穂村史』に載る元禄時代の検地帳による須田家の経済状況の推定を小研究会で紹介したが、本書においても氏が既に注目されていたことを知る)他を訪れると、どこにでも氏の足跡があった。数年後ある文弥人形の発表会で隣席の熱心な老人が一冊の「竹田書き」の台本とスクラップ帳を携えていた。昭和四六年度の『新潟日報』に連載された佐々木氏の「佐渡が島人形ばなし」の丹念なスクラップ帳であった(佐渡の人形芝居はこうした熱心な人形芝居ファンに支えられてきたのである)。この帳を寸見して一驚した。地方紙の地方版に連載されたもので、一般読者に語りかける柔らかな語り口にもかかわらず、詳細な記述、綿密な考証、人形遣いや語り手に関するの実証的な追跡とその人物が髣髴としてくる紹介、佐渡の人形芝居史に関する網羅的な記述等、すでに本書の出版を待たずとも、氏の研究者・啓蒙者・保護育成者としての様子が充分に解されるものであり、その特徴はそのまま本書に引き継がれているものであった。評者は以後も細々と調査を続行してきたが、氏の研究の集成、即ち本書の上梓を待たねば何も発表することなどできなしいと思知らされたのである(どれ程本書の刊行を鶴首していたことか)。

にもかかわらず氏はあとがきで「これは研究書ではありません

ん。人形界のいろいろな人々にあってお話を聞いている中に、名利を離れて人形にかかわった人たちに、次第に好意を感じるようになりました。真野町にある日蓮ゆかりの寺、妙宣寺の庫裡には「遊戯三昧」と書いた大きな額がかかっていました。私の大好きなことばであり、人形界の人々の生き方をあらわしているように思われました。

人形芝居は庶民のものでした。今のように文化財といわれることもなく、太夫や人形つかいを特別にもてはやすこともなかった時代に、わが道を行き、行き行きて世界を異にしたその人たちを、偉いと感じ、その名と行実を明らかにしたい、いわば鎮魂の書としてまとめよう、と思ったのがそもその始まりだったのです。」とあるように研究者としてよりも語り部として、人形関係者を敬愛し、庶民の歴史を「はなし」として纏められたのである。難解な史実、正しい事実を、また今の関係者達を代弁しかつ控え目に鼓吹するものとしての側面も忘れることなく纏められた。換言すれば、生きた民衆史・地方史であり、活ける啓蒙指針の書、敬愛鎮魂の書なのである。氏は先の言に続いて本書を「人形芝居の中の自分史」とも規定されるが、その踏査の足跡、成果を指すならともかく、殆ど氏が表面に出ることとはない。氏の姿は行間から滲み出てくるものであるとしても。

## 2

本書では章、項の番号を符していないが、章立て項立てに準じた分け方をして目次を立てている。更に大まかにこれらを概括すると、人形や節の名称・渡来・初期の状況に関する部分

(章)として「はじめに」「人形芝居の渡来」「人形芝居の普及」十八頁分、説経人形を中心とした部分「人形芝居のあり方」「広栄座の変遷」「その他の説経人形座」六五頁分、文弥節に関する部分「文弥節」四五頁分、文弥人形成立以降現在までの歴史と現状に関する部分「文弥人形の成立」「文弥上京」「尾崎紅葉と人形芝居」「岡本文弥と佐渡の文弥節」「その他の人形座」「新潟交通と文弥人形」「文弥人形の現在」一頁を作る人たち」「芸術祭公演前後」「保存会の人々」「文弥人形発表会」「諸国の文弥人形」「人形芝居のゆくえ」二九三頁分、及び附録の諸資料五五頁分から成り立っている。歴史的な人形芝居の発展史を大きな柱とし分類にも準用する。説経(金平)人形に比べ文弥史に比重が大きいのは氏が文弥の専門化であるためからではなく、明治初期に文弥人形成立以来、大正昭和初期の全盛期を経て今日も十数座を数え得る文弥人形の隆盛に比して、説経人形の座は文弥人形成立とともに減少し、明治後半より今日迄広栄座一座のみ孤壘を保ち伝存してきたのみなので、その歴史やかつての座の伝承を追跡するのは困難であるからでもあろう(評者も痛感させられてきた)。したがって広栄座の現在及びのろま人形については歴史の順でなく前半の説経についての章の中でとりあげられ、大半が文弥人形の歴史とそれに関わってきた人々について論述されることになる。

各纏まりについて概略さえも紹介論評する余裕がないのは残念である。いくつかの点のみ指摘するに留めざるをえない。

最初の纏まりにおいて人形の名称の混乱を匡し、江戸期の資料を余すことなく紹介され考証を加えている、その手続・指

稿の正確さにおいて目下のところこれ以上は不可能であろう。

説経節に関する章においても現在我々が知りうる最前線を極めており、先述のように検地帳にまで目を向けられる先見性と実証性を持ち合せた氏の探索態度は本書全般にいえ多岐に亘って容赦がない。墓・過去帳・戸籍・手紙・寺社の文書・鑑札・絵馬等文献困難な民衆史調査の常套手段とはいえ、手間暇かけた行き届いた調査がなされているのである。その周到さは人形関係者の係累縁者にまで及ぶ。霍間氏所有説経の台本について書写年代、所有した語り手についても精査されているが、「竹田書き」の本来小田家にかつてあった金平の台本数十冊の書名・書誌について概観が紹介されており、今は失われた本の記録として貴重である。佐渡の書き手とその需要、演目の豊富さ、傾向等を知ることができ、その恩恵は多大である。この上に本文についての記録や撮影がなされていればと惜しまれる。伝本は実証的な研究には欠かせない一等史料であるからである。

説経の章の内て語られるのろまん形について一言する。文痴人形の座で伝えられていたのろまん形について氏の知るところがもっと語られていたら、と後人のないものねだりをする。例えば演目の一つ「真光寺老僧」の如く今は演じられなくなったものについての記述がもっと欲しく思われた。

しかしながら霍間氏の晩年に接した評者には聞き得なかった点、聞き逃した点や渡辺甚八郎のエピソードなど地元の研究家ならではの追跡も詳しく、後人の学ぶところ多々であるのは言うまでもない。疑念を挟み異説をたてることが残念乍ら不可能な程多面に亘り実証の目が行き届いている。

文弥節について。既に『近代』誌に二度、佐渡の「文弥」節が近松作品を主に語りながら江戸初期の、義太夫節に淘汰される以前の節を伝えていたことを実証されたが改めて再説されている。そのために文弥調査に乗り出されてまもなく、昭和二〇年代半ばより先駆的に薩摩・加賀・新潟に足を延ばし各地の文弥を比較され、また埼玉県秩父の江戸後期再興の説経祭文(「文弥」の役節がある)とも比較されている(本書三九四ページ以降)。又、九州の盲僧琵琶と類似する節があるのを評者や芸能研究家の村山道宣氏が昭和六十年代に気づいたが(ともに未発表)、氏もとうに御存知であったようである。これらとの比較を通じ、佐渡の文弥節の純粹性を確信されたのであろう。

その上でカンドメを代表とする役節が山本角太夫節と一致することを指摘され、佐渡の文弥節が角太夫の節を伝えること、更に師の岡本文弥の節までこの一致が遡及できる蓋然性が高いことを推定された。このことは既に高い評価を得ている。

江戸期の文書・画像・民謡にみる伝説を通し、文弥節の佐渡伝来を江戸前期と推定される手続きも鮮やかであり、地元の研究家ならではの資料着目ばかりでなく、氏の発想の卓拔さ、慧眼によるものと言わねばならない。氏の検討により、佐渡の文弥節が初代岡本文弥の節をよく伝存している蓋然性は極めて高いといえよう。盲人に長らく伝えられてきたこと自体、この信頼性を高める。

評者に興味深かったのは、文弥節を伝えた盲人の官位取得をめぐる経緯の部分で様々な資料が掲げられ、手際よく処理されていることである。その一つが巻末の附録の一つに翻刻されて

いる「佐渡一國衆分仲間告文改日記」の紹介で、今は失われてしまった一等資料の記録としても貴重である。

こうした検討により、冒頭の人形の名称混乱の腑分けとともに、文弥節の正しい位置づけがなされたことは、語り手達がそれと知らずに伝承してきた営みへの何よりの鎮魂であろう。

文弥人形が成立し、説経人形が急速に文弥高幕人形に転換していく過程については『耳眼書集』や、人形・高幕等の実物資料も伝存し、その跡づけは説経節・文弥節の遡及に比べ容易であり、上記のような他の研究書でもかなり知ることが可能であったが、一つ一つ丁寧に点検され直し、精細に跡づけられている。庄巻は、文弥人形の創始者大崎松之助の伝記についてである。旧来の漠とした伝承を排し、はじめて紹介された戸籍他を元に松之助の生涯、周囲が語られる。子孫による手紙も紹介され、今に至る系譜まで知ることが可能になった。その発端になった、神社の奉納額に気づかれた条は民衆史地方史の研究上後学によき指針になろう。

その他、堅実な氏の探求による実証発見の一、一を挙げるには紙数が足りない。「はなし」と題されたタイトル通り、昔語りを聞く趣の好著でありながら、迂闊な向きが、啓蒙を主にする漫筆、随筆風な入門書とのみ誤解されることを恐れ、氏の奥する意図を省みず、手堅く、佐渡の人形芝居をはじめて大系づけられた学術研究書であることを強調しておく。

巻末附録の史料も、先の史料や文弥節役節の音譜や年表等役に立つものばかりで裨益するところ大であるが、戦後の（文弥）人形史についての略年譜があれば尚、良かったであろう。

もうすでに五〇年の歴史を有しているためでもあるが、本文の記述を見ている限り保存会関係の記述の混乱（聞き書きの部分による不一致）により、その動向が外部の者によくわからず、また戦後の上演状況や記録を氏が最もよく御存知なので。

3

本書の性格は以上のような研究書の側面に留まらないところにむしろ大きな特徴がある。各座の推移消長を細大漏らさず紹介されながら、太夫・遣い手・その他の支え手の動向・言動を客観的に尚かつ暖かく記述されることである。その一つは、明治維新期の会津落城を経験した相川在住の女性が『源氏烏帽子折』の「伏見の里」を聞いて、城が落ちた折自身の子供を連れて逃げのびたことを思い出し身につまされてさめざめと泣いたというエピソード（かつての聞き手の態度、鑑賞の様相をよく伝えてい）や、日露戦争で出征中の太夫にまで弟が人形芝居の動向を伝える書簡等の、島外者にも興味深い資料、明治四年生れの中川閑楽が幼少期に『実語教』『童子教』『庭訓往来』による教育を受けた（別の箇所では四書五経を明治の寺小屋で授けていた史実が語られる）という庶民教育史の一端、三味線の取引きを巡る借用証書や鑑札を巡るユーモラスな争いなど庶民史としての資料になるような龐大な「はなし」の紹介である。また一つは、芸熱心だった人々の言動の紹介によって彼等への「鎮魂」にしているとともに、それがさりげなく今の人形関係者へのアドバイスになっていることである。イカ漁の舟の中で語った太夫のはなし、薙刀の工夫をした遣い手のこと、指導や

習得のために泊まりがけで何十キロもの道を通い続けた人々の話、人形の殿堂建設を夢見ながら、指導した外国人に人形を持たせて帰国させてやる九六歳の今も現役の遣い手等のあり方や片言の記述から様々なアドバイスと叱咤激励を受けられるであろう。その他にも芸の上での工夫についての隻句が方言のまま記載されている。講壇的な教えではなく、身近な体験談や諭しのさりげない紹介の形になっているので自然に受け入れられるであろう。しかもこうした聞き書きにも考証の目が届いている。

同時に過去の名人達者の見聞のみでなく、今の座の工夫特徴についても余さず記録される。昔風に人形の陰になるよう遣う座のあり方をさりげなく紹介され、皆で本読みから始めるある座の様子などを、強く誉め讃えるという風にはなく、さりげない紹介に留めている(いろいろな観点からの周到な配慮の上であろう)。評者が回ったいくつかの座には必ず熱心な敏い人達がいるので、必ずやこうして紹介された点も受け入れられていくであろう。その点も氏は十分見通しているのではなからうか。

聞き手のことへの言及も大切で、昔の鋭い聴き手のあり方が処々で紹介されている。天皇役の人形遣いが畏りすぎで動き方に迷惑していると「天皇さんは雛さんか」とすかさずヤジられたというエピソードを紹介するという具合にである。

能との関わりや記述も芸能史としては重要であろう。能との対抗意識から人形が発展してきた側面や能をも演じる遣い手により人形の遣い方が工夫されたこと(鬼太鼓の発達とあわせ興味深い)、能面打ちが多くいて人形の首の優品が多く彫られる

に至ったこと、彼等に佐渡が誇る世界的な版画家高橋信一氏が首の塗りを各地方の指導をしたエピソード(氏は佐渡の民衆に木版画の指導を開かれるに至った程の指導者で佐々木氏とよく似た郷土の館が開かれるに至った程の指導者で佐々木氏とよく似た郷土の指導者である。こうした人々に恵まれる佐渡は幸せである)等、能という都会の高級な鑑賞のされ方とは別の側面が知られよう。かつては馬子が謡を口遊みながら馬を牽いた土地柄という。

## 4

高橋氏ばかりでなく、佐渡支庁、新潟交通、佐渡汽船等の役所・企業にも具眼の士がいて人形に援助してくれる人々も漏らさず紹介される。島外者や一般の研究者には不用のことも多いだろうが、翻って民衆史として地に着いた地方史として、又人形関係者への「鎮魂」と励ましの書として、生きた啓蒙指導の書としてみた場合、実に適切な書き方語り方であると言わねばならない。したがって登場人物の多くに彼らが到達した地位、役職などにまで筆が及ぶのである。整理しすぎた学術書・理論書では実践に役立たない。漫然とエピソードを紹介するのみでは一部の愛好者にしか読まれない。そうした書の多くが著者の知識と知恵を腐らせてしまっている。五百ページ近い大著を、生業に稽古に忙がしい語り手達、遣い手達に読破してもらうのも困難であろうが、控え目にさりげなく一人一人の関係者に余すところなく、誇りを持つよう又讃えているのを了解されるであろう。新聞の地方版での語り口と同じ態度でものされた本書は、晦渋な論述とは無縁でありながら、よく整理された体系化

されていて、何度も書かざるを得ないが、学術研究の態度と啓蒙の態度とが穏やかな語り口の裡にみごとに総合化されているので困炉里傍で「はなし」を聞くが如き記述である。その態度は前著『文弥節太夫 中川閑菜』（明治四年生、昭和三八年没、享年九三歳の文弥節の名人の伝記）における佐々木氏の閑菜氏への追慕と敬愛の態度と変らぬもので、人形関係者への深い敬愛の念によるものであることはいうまでもない。

一行一行が歩いて調べ上げ聞き出された記述であり、屢述したように真の民衆史、血の通った芸能史、生きた地方史というべき本書は、理論のための理論、学問のための学問となりながら、研究者に反省を迫る労作であり、科学的実証的でありながら読み易く実践的啓蒙的であるという理想的な一書、範とすべき書物となりえているのである。

そうなりえたのも偏えに氏の人柄によるものと敢て述べておきたい。昨年、本誌の地元の国立市にある「たましん地域文化財団」によって刊行された、柗國男氏著、多摩歴史叢書4『土の巨人——考古学を拓いた人々たち——』も、塩野半十郎氏や橋本義夫氏達を顕彰する著として意義深いものであるとともに、これらの野に生きた先人を敬愛追慕する柗氏（氏自身、藤森栄一賞を受賞した一級の研究者であるが）の姿勢及び人柄と同質のものを佐々木氏に感じるのには評者ばかりではないだろう。こうした語り部を持ち得た佐渡（多摩も）の人々は幸せである。

尚、九五年に氏は奥様令嬢をあいっいで失った中で、明治四二年生れの氏が本書を上梓されるにこぎつけられたこと、江戸の古い説経を伝え、氏と同年生まれであった霍間幸雄氏の、

本書上梓（三月二六日）直前の二月二八日の計報についてまで校正の斧を加えられたこと、出版祝賀会に出席させよと強要する評者に対し、氏自身はお許し下さったものの、佐渡の人形関係者に限られる宴になったことも、氏にふさわしい祝賀会であったので一言付しておきたい。（佐渡が島人形ばなし刊行会）刊 平八 新潟県佐渡郡真野町新町 佐々木方）  
付 氏の他の著作を掲げておきたい。

「人形芝居の変遷」『郷土研究佐渡』誌「人形芝居」特集号（昭三〇・一一）及びその復刊合冊集（昭五二）

「佐渡人形芝居」『近代』三号、昭三一・九

「ある文弥人の一生」『近代』四号、昭三五

「佐渡が島人形ばなし」『新潟日報』一三〇回連載 昭四六

「文弥節太夫 中川閑菜」昭五四

「佐渡が島芸能の四季」朝日ソノラマ 昭四七・八

「佐渡歴史文化シリーズ5」『佐渡の人形芝居』『佐渡芸能史上巻』昭五二・八

「文弥節太夫の系譜」『浜田守太郎の世界』佐渡汽船 平五  
この他、台本集『文弥節浄瑠璃集 上下』のフシ付（昭五三、五四）、中川閑菜記念テープ集及び同解説。昭四七国立劇場公演「古浄瑠璃系人形と特殊な一人遣い」パンフレット解説。「佐渡の人形芝居」『佐渡の芸能』（文理閣 昭六一）。

（一橋大学教授）